(本稿は学事出版より発刊された月刊生徒指導 54(8) 2024 年7月号 に掲載された記事『ライブ講義 教育相談 最新トピック 12(4)主体的な学習者を育てる UDL』の字数の都合で掲載されなかった説明を加えたものになります。オリジナルに関しては学事出版のウェブサイトより手に入れることができますので、ぜひお求めください)

主体的な学習者を育てるUDL

下関市立大学 教授 教養教職機構長

北海道教育大学未来の学び協創センター共同研究員

中林 浩子[1]

Society5.0(科学技術基本計画第5期 2016)に示されたように、科学技術の進歩とともに社会も教育のあり方も大きく変わってきました。2017年に新しい学習指導要領が公示され、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行うことの必要性が示され、中央教育審議会答申(2021)では、誰一人取り残すことのない『令和の日本型教育』として「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学び」実現の重要性が示されました。更に、2022年に改訂された生徒指導提要(文部科学省)でも、授業は全ての児童生徒を対象とした発達支持的生徒指導の場であるとしています。自ら考え、選択し、決定する等、主体的な学習者を育てる授業への転換が示されたのです。そこで本稿ではこれらを実現するための取組として、筆者の学校現場における実践を踏まえながら、学びのユニバーサルデザイン(Universal Design for Learning:以下、UDL)について紹介します。

学習指導の前提

学習の主体は、学習者である児童生徒であることは言うまでもありません。そして教室には、様々な教育的ニーズを持った多様な児童生徒が学んでいます。私たち教師の役割は、このすべての児童生徒のニーズに応え、一人一人の学力を伸ばし、よい学習者に育てることです。よい学習者とは、自らの学びを自分で舵取りすることができる主体的な学習者です。つまりよい学習者に育つことが学力の伸長につながると言い換えることができます。

しかし、筆者は、中学校現場や小学校現場を経験する中で、依然として教師が主導する授業を目の当たりにしてきました。授業のほとんどの時間を教師が説明し、それを黙って聞いている児童生徒の姿や、教師に「先生、これはノートに書きますか?」と確認したり「先生、この先の問題をやってもいいですか?」と判断を委ねたりする児童生徒の姿などから、教師のやり方に合わせて児童生徒が学ぶ授業のあり方に限界を感じていました。そんな時に、出会ったのがUDLでした。UDLは、個性や特性、障害の有無にかかわらず、教室にいるすべての児童生徒

[1] 公立中学校教諭、指導主事、中・小学校の管理職を経て現職。現場では、自分の学びと生活を自ら舵取りできる子どもの育成を目指した学校づくりに取り組む。日本学校教育相談学会事務局次長、日本ピア・サポート学会常任理事・研修委員長。

が自らの学びを自分で舵取りできる「学びのエキスパート」になれるよう教師が支援することを目的としています。そう考えると、UDLが指導法や方法論ではないことがわかります。

UDLとは

では一体、UDLとは、何なのでしょうか？

UDLは、米国の研究機関 Center for Applied Special Technology（CAST）が20年余にも及ぶ研究とエビデンスに基づき提唱した、教室にいるすべての児童生徒が学べるための授業デザインの考え方の枠組み（UDLでは、フレームワークと表現）を示すものです。そして、この枠組みは、横軸に示す学習についての「取り組み」「提示（理解）」「行動（表出）」からなる三つの原則と縦軸に示す「アクセスする」「積み上げる」「自分のものにする」という学習者の成長を三段階に示した合計9つからなるガイドラインに整理されています。バーンズ（2020）は、UDLの強みを脳科学、学習科学、発達心理学、神経心理学などに基づいて開発されているところであり、科学的なエビデンスに基づいたその原則やガイドラインは、国や文化を超えて汎用性が高いことを挙げています。

UDLに拠れば、教師の仕事は、教室にいる多様な児童生徒一人一人が、自分の学びやすい方法で柔軟に学べるように環境づくりをし、学習者である児童生徒が主体的に学べるように包括的に支援していくことです。UDLでは、そのことを「伴走する」と表現します。

UDLが目指すところは、「学びのエキスパート」を育てることにあります。これは、まさに、これまでの教師が教え導く指導観から脱却し、教師は、児童生徒の主体的な学びをサポートする環境を整え、主体的に学ぶことを伴走するということです。

つまり、「児童生徒が主体的な学習者として成長する授業」へと転換するためには、教師自らが主体的な学習者へと成長していかなければならないということに他なりません。

なぜ、UDLが必要か

さて、児童生徒それぞれに存在する固有差や多様性について考えたいと思います。教室にいる児童生徒は、わかる・できるのスピードや興味・関心、学びやすさ、学び方のスタイルなども一人一人異なっています。当然大きな学力差も存在します。ですから、教師が自分のやり方で一斉に、全員が分かるように教えることは不可能と言えるでしょう。そう考えると、教師の考える一つの学び方に固執することは、そのやり方では学べない児童生徒にとっても、何とかして分かるようにしてあげようとする教師にとっても、決して良好な取り組みとは言えません。

だからこそUDLが必要なのです。UDLでは、そういった多様性を念頭に置いて、特定の学習者に「学びにくさ」という学びの障壁（以下、バリア）が生じないよう、事前にUDLの三原則に基づいて、授業の「ゴール」「教材」「方法・手段」「評価」（UDLでは、この4つを総称してカリキュラムと表現）を柔軟にデザインしていくことで、誰もが学びに向かい、主体的な学習者を育てる授業への転換を促します。

以上のことから、筆者は、「教師が教える」授業から「児童生徒が主体的に学ぶ」授業への転換を図るうえで、このUDLの概念フレームワークは、大きな指針となると確信し、学校全体で、UDLを基軸にした授業改革に取り組むこととしました。

「GOAL」と「WHY」

UDLは、自らの学びを舵取りできる主体的な学習者（学びのエキスパート）に育つことを支援することが目的です。そのために、授業における「GOAL（何を学ぶのか）」と「WHY（なぜ学ぶか）」を明確に提示します。児童生徒は、これが示されることによって、主体的な学習者として、何を期待されているのかを理解することができます。そして、児童生徒は、学習の「GOAL（目的）」と「WHY（なぜ学ぶのか）」に基づいて、事前に用意されたオプションを主体的に選択し、自分で調整しながら学んでいきます。もし、UDLを基軸にした授業改善に取り組んで、うまくいかない事態になった時には、このGOALとWHYが学習者に分かるように明確に示されているかを再確認することが大切です。筆者は、多くの学校で授業を参観する機会がありますが、その際に、教室後方に座っている児童生徒に「GOAL」と「WHY」の意識についてそっと確認することにしています。この「GOAL」と「WHY」の明確さが、自分の学びを舵取りできる主体的な学習者になるための鍵になると言っても過言ではないからです。

意図的に授業をデザインする

授業を参観すると、机に突っ伏している児童生徒や何もしていない児童生徒を見かけることがあります。授業者にそのことを尋ねると、「あの生徒は、いつもそうなんです」「あの児童は、特性が強いので・・・」という返答がかえってくることがしばしばあります。UDLでは、学びにくさは学習者にあるのではなく、授業者である教師が考えた授業デザインのカリキュラムの中、すなわち、「GOAL」「教材」「方法・手段」「評価」にあるという考え方をします。そのため、教師は、自分の考えた授業デザインの中に必ず「学びにくさ」が存在すると想定し、児童生徒の学びを阻む「カリキュラムの障害」を特定します。そして、特定したその「学びにくさ」を取り除くために用意するのが「オプション」です。

例えば、数学の演習問題を解く場面で、ヒントがあれば、それを手掛かりに解くことができる生徒がいるとします。通常、ヒントや解説プリントなどは、教師が一方的に、しかも善意で、全員に配ることが多々あります。UDLでは、このようなヒントや解説は、全員に配ることはせず、必要な時に必要な人が自分で取りに来る、もしくは見に来ることができるようにします。このような足場的支援は、学習者自身が自分の学び方を調整する力を促進すると考えます。また、うまく調整できない場合でも、教師が「なぜ、これを選んだの？」「やってみてどうだった？」「もう少し具体的に教えて」などフィードバックを通して、学習者自身が主体的に自分の学び方を調整できるように伴走していきます。

川俣（2020）は、UDLにおけるオプションの提示の仕方について、学習者自身が学び方を選択することが、学習者としての発達を促すという、発達の最近接領域（zone of proximal development:ZPD）の理論に基づいた足場的支援（Scaffolding）の発想が根底にあり、この概念を適切に理解し、学習者としての発達を念頭に置いてUDLの枠組みを実施することで、教室を学習支援の場から、学習者の発達支援の場へと変容させることが期待できると述べています。

UDLについての誤解

最近、「UDLって、主体的な学習者を育てるのだから、学ぶ内容も目標もすべてを子どもに決めさせることなんですよね。」という質問が寄せられることがありますが、これは誤解です。
これについては、バーンズは、インタビュー（2023）で、
「授業は教師がデザインするものですが、単元で教える内容は変わりません。また、単元で学ぶべき目標は学習指導要領に沿って教師が決めますが、それと並行して、子どもが自分の学習目標を決めることもあります。例えば、自分は途中で投げ出しがちだから、『諦めずに最後までやる』をゴールにするといった具合です。このように、UDLは、どのように学ぶかを子どもが選べるようにするものであり、決められた学習内容まで変わるわけではありません。」と、明確に語っています。

UDLを基軸にした授業改革に取り組んで

前述のとおり、筆者は校長として勤務した中学校と小学校、それぞれ2年間、誰もが学べる教室を目指して、学校全体でこのUDLに基づく授業改革に取り組みました。すぐに「授業は先生が教えるもの」から「授業は自分が学ぶもの」へとマインドセットを転換したのは児童生徒たちです。印象深いのは、小学校校長に着任当初、いつ授業を見に行っても、ずっと机に突っ伏したまま反応しなかった4年生のAさんが、この授業改革により、授業中の態度が一変したのです。自分から行動し、友達とかかわり、主体的な態度が増えました。授業に参加できるようになったことにより、学校生活に対しても前向きな気持ちを持つことができたのでしょうか、時間を意識して生活する様子や友達と歓談する姿が以前よりも多く見られるようになったのです。その後もAさんは主体的に学び続け、中学2年生になった現在も一日も欠席することなく楽しく中学校生活を送っているそうです。

次に喜んだのは、保護者の方々です。「子どもが、学校が楽しくなったと言っています。」「これまで、家で勉強なんてしたことがなかったのに、何にも言わなくても自分から勉強するようになりました。」「校長先生、絶対にやり遂げてくださいね。」など、保護者の方々の肯定的な反応は予想以上でした。実は、この小学校では、UDLに基づいた授業改革を推進するためには、教員も主体的に学ぶ必要があり、保護者の承諾を得て、月に1回、5限の授業をカットして授業改革に特化した3時間の教員研修を行っていました。保護者の方々の理解と応援は、授業改革の大きな励みとなりました。

一方で、マインドセットの転換が難しかったのは、中学校でも小学校でも教員でした。ただ毎月の教員研修を継続して授業改革を進めた結果、先生方にも次のような気づきと変化が生まれました。

・教師になって、知識を教えることばかり考えたり、当たり前だと信じて実践してきたことが、実は、生徒にとっての学びにくさになっていたことに気がついた。
・これまで、自分の教え方ばかり考えていて、目の前の生徒、それも多様な生徒のことを見ていなかったのかもしれない。
・「何を学ぶか」と「なぜ学ぶか」が明確だったら、子どもは自分のやり方で自ら学ぶ。集中して、一生懸命に学ぶ。
・あの子が、こんなに意欲的に授業に参加するなんて！学びを阻害していたのは自分の授業デザインにあった。

今、目の前にいる子どもは、今後、ますます予測不能な時代を生きることになります。これからの未来を豊かにたくましく生きていくために必要な力、自分の学びを自ら舵取る学習者を育てることができるのは「学校教育」をおいてはありません。それは、つまり、「人を育てる」私たち教師にマインドセットの転換が求められていることに他ならないのだと私は強く感じています。

UDLを学びたい人のために

本稿では、紙面の都合上、UDLの概要を紹介するにとどめました。そこで、もっとUDLを学んでみたいとお考えの読者のみなさんのために、現時点で、日本内外におけるUDLの様々な情報が得られる Web サイトを2つご紹介します。

・北海道教育大学未来の学び協創センターUDLラボ

https://udl-lab2023.my.canva.site/home

CAST が提唱するUDLの正しい理解と普及のために、研究と情報発信、研修、PLC の運営に取り組んでおり、UDLに関する様々な情報が得られます。

・CAST の Web サイト https://www.cast.org

【引用・参考文献】

- トレイシー・E・ホール、アン・マイヤー、ディビッド・H・ローズ編 バーンズ亀山静子訳（2018）UDL 学びのユニバーサルデザイン 第1章 PP.12-24, 訳者解説 pp.244-251 東洋館出版社
- バーンズ亀山静子 著（2020）指導と評価 特集 学びのユニバーサルデザイン（UDL）UDLとは何か pp.6-8 図書文化社
- 川俣 智路 著（2020）指導と評価 特集 学びのユニバーサルデザイン（UDL）学習支援から学習者の発達支援へ ―UDLを支える足場的支援（Scaffolding） pp.9-11 図書文化社
- 東洋経済 education ICT 編集部(2023)「学びのユニバーサルデザイン」が、主体的な学びや個別最適な学びに必要な訳 自ら学びを舵取りできるようになるための UDL (https://toyokeizai.net/articles/-/693851 2024年 5 月 10 日閲覧)

※この記事の管理は北海道教育大学未来の学び協創研究センターUDL ラボにて実施しています。引用、印刷配布は商用利用ではない場合は可能です。その際には、「中林浩子(2024) 主体的な学習者を育てる UDL（学事出版月間生徒指導 24 年 7 月号補完版）, UDL ラボウェブサイト(https://tinyurl.com/2bas9smo)」と明記してください。